

【水銀の海/ウムラウト(umraut)；各曲コメント 1991 &2017】

ウムラウトの活動期間は、1991-92年の約1年間。切っ掛けはもう忘れましたが、坪内さんが当時勤めていた〈カブトムシ温泉(香川県)；今はもう無い〉から新居浜へ帰ってきたことから始まります。各自がレパートリーを持ち寄り「あまりフォークっぽくならず、互いがギター、ボーカル、ハモリ、リードを同じくらいの比率でやってみよう」ということをテーマに取り組みました。今振り返るとそんなに暇でもなかったとは思いますが、練習場所は私の住んでいたマンション。近隣の方にはさぞかし迷惑だったと思います。時々ライブをしたりしていましたが、本CDはそれらの活動の締め括りとして制作しました。録音方法は私のコンポ(珍しくマイクジャックとエコー調整付)と近くの楽器店での演奏をラジカセで生録音という手法でした。何回も何曲も試みましたが、CDに収められたものがベストテイクということで、ここまでが当時の我々のテクニックと感性の限界でした。

下記コメントは、本作品のプロトタイプであった坪内さん制作のカセット「靴下に詰めて(1991)」に付けられたブックレットからのものに私が加筆したものです。聴きながらお読みくだされば幸いです。

—2017年5月、クマモト—

Tr 01；ムーンライトが消える前に (Lyric & Music；Y. Tsubouchi)

窓から差し込む月の光が眩しいくらいに明るいことに気が付いた。なかなか寝付けないまま、僕の頭の中ではひとつの物語が出来上がっていた。一番のサビに入る前の「もうこのままじゃられない」は、かの有名な男女七人秋物語の中での大竹しのぶのセリフで、すごく心に残っている言葉です。ちなみに男女七人～は、ほとんどセリフを覚えてしまうくらい観ました。(坪;1991)

Tr 02；僕だけが… (Lyric & Music；Y. Tsubouchi)

この曲は今回のアルバム(当時；靴下に詰めて)の中でもかなり思い入れのある曲で、ちょうど今流行りのドラマ「逢いたい時にあなたはいない…」の様な遠距離恋愛がテーマになっています。ある時ひょんな事で知り合い、あっという間に恋に落ちたというシチュエーション。その後、彼女は結婚したことを知りました。もし現在、こんな歌を聞いたとしたら(ありえないことだけど)きっと彼女は笑うと思うけど…。(坪;1991)

Tr 03；月下の街でピーターパン (Lyric & Music；T.Okayama)

Kiyama(T. O.) - sanの名曲をカバー。1983年夏に松山市民会館で「唄をつくる会」の定期演奏会があり、ロックバージョンでオープニングを飾った曲でした。スモークの中からバンドが登場するという演出に当時、新入大学生だった私は大きな衝撃と感銘を受けました。それにしても詞も曲も今聴いても素晴らしい出来栄えだと思えます。(熊)

Tr 04；月の雫 (Lyric & Music；S. Kumamoto)

タイトルに追いついていけない感は拭えないのですが、昼夜逆転の長い学生生活(7年)で時々愛用していた自転車で大街道(市内繁華街)をうろついていた日々を思い出します。(熊)

Tr 05；I Love You (Lyric & Music；T.Okayama)

この曲もO氏のカバーでアレンジはThe Style Councilを意識(パクリ)。サークル内ではスタンダードナンバーでした。よくよく考えると“I Love You(愛してる)”というタイトルもなかなか付けられるものじゃありません。多くの仲間から愛された一曲です。(熊)

Tr 06；Forget Me Not (Lyric & Music；Y. Tsubouchi)

遠い夏のイメージを連想させます。Tさんのピュアな感性に拍手！学生時代の彼のバラードにはない少し大人な切なさや余裕のようなものを感じるのは私だけでしょうか？(熊)

Tr 07；Kill The Blue (Lyric；S. Kumamoto, Music；S. Kumamoto&T.Okayama)

ウムラウト用の曲として取り組みました。もう「惚れた腫れた」だけではない世界観を表現したいと思い、背伸びした言葉を使いましたが、今一つ自分のものになっていないような？当時の楽譜を見直すと記憶にはなかったのですが共作者としてO氏がクレジットされていました！(熊)

Tr 08 ; ベランダの孤独 (Lyric & Music ; S. Kumamoto)

前曲同様孤独な内面表現シリーズの一曲。イントロのTさんの弦きは意味不明にして味あり。(笑) ベランダから飛び降りでもしそうな雰囲気ですが、夢からハッと醒めるイメージで…。(熊)

Tr 09 ; ぎこちないギター (Lyric & Music ; Y. Tsubouchi)

歌にしても楽器にしても流暢であればそれだけで心に訴えかけてくるものではないと思う。時としてぎこちなくたどたどしいものがあらゆるテクニックを駆使した完璧なものを遥かに超えてしまう瞬間がある。しばらくの間オチのつかないまま眠り続けていたこの曲は、彼女のギターがたまたまヘタクソだったお蔭でようやく日の目を見ることが出来たのです。(坪;1991)

Tr 10 ; Stay By Me (Lyric & Music ; T.Okayama)

この曲を書いたT.O.とは中学時代からの僕の友人で大学も同じ所に進み「階段教室 402」の中の一節“あいつの歌を聴いたら…”のあいつとは何を隠そう彼の事です。高校時代から彼の歌を聞いていた僕は彼の曲作りのセンスの良さや歌の上手さには嫉妬に近いものを覚える事もしばしば僕にとってはかなり大きな存在です。ところでこの「Stay By Me」てつきり彼女にふられるかと思いきや彼の話によるとなんと彼女は亡くなっただけ。この情報をインプットしてもう一度聴いて頂けばせつなさも倍増する事でしょう。それから多分お分かりの事と思いますが、ジョンとヨーコとはジョンレノンとオノヨーコの事で決してケンとメリーのスカイラインの事ではありません。悪しからず…。(坪;1991)

Tr 11 ; You made me (Lyric & Music ; S. Kumamoto)

お洒落でせつない雰囲気のバラードを書きたくて add9 コードを使ってみました。当時よく聴いていた洋楽を下敷きにしました。間奏のギターソロはTさんが弾き、なかなかイイ感じだと思います。後奏は似たフレーズを自分で弾いてみましたが、その緻密さではTさんに完敗でした。(熊)

Tr 12 ; 階段教室 402 (Lyric & Music ; Y. Tsubouchi)

大学時代に僕が所属していた音楽系サークルには部室がなかったため、先輩の下宿に置いてあった機材一式を大学の階段教室に運び込みよく練習したものです。後半はスタジオを借りて練習するようになり、すごく楽にはなったのだけど、大体の物は揃っているはずのスタジオにない物が階段教室 402 にはいっぱいあった気がします。(坪;1991)

Tr 13 ; 風の吹く夜に (Lyric ; Y. Tsubouchi&S.Kumamoto, Music ; Y. Tsubouchi)

Tさんはそれまでも様々な曲を書いていて、例えばGコードで始まる“シリーズGのバラード”中途半端な(失礼)ポップロックの“イカした今夜、キミをオーバーヒートさせちゃうよ”シリーズ等々…。umrautではそれらからの脱却もテーマでした(?)この曲は、ある夜Tさんが「詞がまだ半分しか出来てないんだけど」と持ってきたものでした。二人であれこれ言葉を探し完成したのですが、個人的には今でも大好きな、そして初めて共作した思い出の一曲です。(熊)

Tr 14 ; My Favorite Town (Lyric & Music ; S. Kumamoto)

この頃の私はもう仕事をしていて大学病院に勤めていました。音楽との縁は断ち切ったはずでしたが、当時「音楽療法」が医療の現場で注目を浴びていて後輩(といっても年長者;元プロドラマー)の誘いもあり、またギターやピアノを触るようになりました。この曲は松山から今治への転勤が決まり、当時住んでいた松山市の隣の砥部町の川沿いのアパート(ちょうど今回のジャケット写真)で作ったことを思い出します。(熊)

…Bonus Songs …

Tr 15;Sunny Side& Tr 16;Blue Mart (Lyric & Music ; S. Kumamoto From “Blue Mart”by The Wendy 1988)

ウムラウトでも再演した曲のバンドバージョンが残っていました。松山市内の音楽スタジオで16チャンネルのマルチトラックレコーディングで自分達が少しプロになった気分でした。CDのテーマは“他所から来た我々が松山という通り過ぎゆく学生街をどのように客観視するか?”などといった今となれば少し子供っぽい発想でした。音像は80年代後半の雰囲気でしょうか?自分の声にハモリを録音するのも新鮮でした。当時のメンバー、今頃どうしているのかな?(熊)